

上毛町

上毛町には「友枝神楽講」「唐原神楽講」「成恒神楽講」の3つの神楽団体が豊前神楽保存連合会に加盟しており、豊前神楽の保存、継承に日々努めています。令和6年度の各団体の活動は、コロナ禍をのりこえ以前の状態を取り戻したと言えます。各々の団体の活動のことなので、神楽を奉納した場所や回数等は詳細に把握していませんが、成恒神楽講は夏ころに東京の靖国神社で奉納したようです。

また、各団体とも、後継者の育成に力を入れており、子供神楽の指導に関しても熱心に取り組んでいます。文化財の継承、特に無形文化財の継承には困難が伴いますが、出来る限り続けて欲しいものです。

築上町

2024年は春と秋の神幸祭や年越し行事にあわせて町内各地で神楽が奉納されました。また築上町観光協会が旧蔵内邸夜間特別公開ツアー旅行の一環で、蔵内氏が建てた上深野の貴船神社での神楽上演を企画し、赤幡神楽が奉納され、お囃子に合わせて舞う姿に見学者の視線が集まりました。

9月29日(日)には「築上町神楽・民俗芸能祭」が築上町コミュニティセンターソピアで開催されました。これは、町内の神楽や楽打ちなどの民俗芸能を多くの方々に知っていただくことを目的に防衛省米軍再編交付金事業により築上町が開催しているもので、築上町が誕生した翌年の平成 19 年度から開催し、今年で 11 回目となります。

小原神楽講の「米撒(くままき)」と「小神楽(一の切)」に始まり、最後は赤幡神楽保存会による「戸前」で幕を閉じました。お囃子の音色にのせた湊金富神楽保存会の「御福(みふく)」は優雅で、岩丸神楽の「銀杏御先(ぎんなんみさき)」に登場する鬼はとても勇壮でした。

11月10日(日)には熊本県八代市で開催された「第66回九州地区民俗芸能大会」に小原神楽講が出演し、御先神楽を上演しました。小原神楽独自の变化に富んだ節回しのお囃子の音色にのせて、幣方と鬼がぶつかり合う迫力あるシーンに観客は魅了されていました。

12月8日(日)には伝法寺の岩戸見神社で「午祭り」に合わせ、上城井地区の寒田神楽講・櫛原神楽講・岩戸見神社岩戸神楽岩戸楽伝法寺保存会3団体による神楽の共演が行われました。城井谷の中山間部に位置する上城井地区は古くから岩戸見神社を中心としたつながりがあり、数年前から年に1回程度、3団体による神楽の共演が行われています。高齢化と過疎化が進み、講員不足と次世代への継承が課題となる中、こうした地域の取り組みは重要であり、今後も継続していただきたいと考えています。



小原神楽講「御先」(第66回九州地区民俗芸能大会)
(写真提供)第66回九州地区民俗芸能大会実行委員会



湊金富神楽保存会「御福神楽」
第11回築上町神楽・民俗芸能祭 2024.



岩丸神楽講「銀杏御先」
第11回築上町神楽・民俗芸能祭 2024.

【編集後記】

コロナ禍の影響で地区の神幸行事を中止せざるを得ない状況になり、神楽奉納も一時休止した影響は、平静を取り戻しつつある今日にも大きな禍根を残しました。いざ再開しようとするも舞手が確保できず活動を休止する団体も現れています。そうした中、地域の神楽講どうしの連帯を強化し、子どもたちへの神楽継承を活発化する動きも見られます。豊前神楽にとって明るい未来を希望しつつ、会報誌をお届けしたいと思います。

神座～カムクラ～

神楽奉納の今と今後の課題

新型コロナウイルス禍もようやく落ち着きを取り戻しつつある昨今、豊前神楽各団体におきまして、ようやく平静を取り戻しつつあります。しかし講員の減少などの問題に直面する中、神楽講を存続させ、次世代へ継承するための取組が求められています。

今回は本年度の豊前神楽各団体の奉納の様子について報告するとともに、これからの課題や展望について特集したいと思います。

各地の神楽奉納と継承への取り組み

添田町(津野神楽保存会)

津野神楽保存会の皆さんにより、5月3日に上津野地区の高木神社の神幸祭の御旅所で、翌日の4日に下津野地区の高木神社の神幸祭の御旅所で、それぞれ津野神楽が奉納されました。3日の奉納では、19時から5時間以上もかけて笛や太鼓、鐘の音に合わせ、「折居」「メ切」「地割」「綱御先」など12の演目が荘厳に舞われました。

保存会では、これまで津野集落に住む地域住民のみで神楽を奉納していましたが、近年は地域の過疎化に伴う人口減少により神楽の演者・奏者ともに担い手の確保が困難となり、現在は集落外に住む津野出身者も参加して神楽の保存・継承に努めています。

添田町では津野神楽をふくめ、民俗芸能の保存・継承は地域住民の活動の継承に対する使命感やボランティア精神に頼る部分が大きいのが現状です。そのため、添田町においては民俗芸能の保存・継承に努める各団体と意見交換会を実施して、各団体が持つ担い手不足や後継者問題などの課題を共有し、活動団体と一緒に民俗芸能が保存・継承されるように取り組んでいます。

吉富町



本町の2つの神楽講では、町のキッズクラブ活動の「神楽教室」の活動や神楽講ごとの子ども神楽も盛んで、後継者の育成にもつながっています。また、令和6年度の吉富町における秋祭りは、コロナ禍の収束を受け、多くの地区で神楽奉納を伴う通常の形式で再び開催されるようになりました。

しかし、コロナ禍の影響により地区行事全般、特に祭りの実施・運営体制が大きく後退し、深刻な人手不足に直面している地区も少なくありません。通常、地区行事、特に祭りのような伝統的な行事は、継続して行うことによって関係者の意欲や使命感が保たれ、その文化や習慣が世代を超えて受け継がれていくものです。一度その連続性が途切れてしまうと、再び復興させるのは非常に困難なものとなりますので、各地区での継続の努力が必要になってくるものと思います。

田川市(春日神社岩戸神楽保存会)

令和6年度も春日神社が執り行う神幸祭・夏越祭・神待祭での神楽奉納を軸に活動を行ってきました。

毎年5月の第4土・日曜日開催の神幸祭では、日中は神輿と共に地域を巡行し、夜は後藤寺商店街振興組合の施設内で神楽奉納を行いました。

例年10月最終土曜日の夜に執り行われる神待祭での神楽奉納は、翌日が衆議院議員総選挙の投開票日になったことから、演目を調整し奉納時間を短縮する対応が求められました。これは保存会の会員に市職員が多数在籍しており、早朝から夜間にかけて投開票事務従事が発生したからです。近年の感染症対策然り、意図せぬ形で奉納に影響が出ることがあるのだと考えさせられました。

神待祭後の11月上旬には、神楽に使用する衣裳などのガス燻蒸を行い、翌週にそれらの目通し・風通しを行ないました。

嬉しいニュースとしては、小学5・6年生の男子児童2人が神楽をやりたいと保存会の扉を叩いてくれたことです。彼らの情熱が続くことを願ってやみません。

みやこ町

新型コロナの5類移行から1年が経過した令和6年における、みやこ町内での豊前神楽の奉納状況は以下のようなものとなりました。

1. 鏡畑神楽(みやこ町犀川鏡畑) : 中止
2. 上伊良原神楽(みやこ町犀川上伊良原) : 中止
3. 上高屋神楽(みやこ町犀川上高屋) : 奉納(4月28日／奉納時間等若干調整)
4. 光富神楽(みやこ町光富) : 中止
5. 横瀬神楽(みやこ町犀川横瀬) : 奉納(5月2・3日／奉納時間等若干調整)

昨年同様、奉納が行われた処とそうでない処に分れたうえ、奉納中止が1団体増える結果となりました。奉納できた処とそうでない処の差は、奇しくも標高100mを境にした山間地と平野部の地域差となり、これは地域における伝承環境の厳しさが反映されたものといえ、その状況に変化がなかっただけでなく、そうした環境下で一旦中止された神楽(を含む民俗芸能や行事)を再興することがいかに困難かを物語っています。

なお、一団体増えた理由は、いわゆる「火がかり」と呼ばれる服喪によるもので、神楽の世界ならではの理由としてある意味やむを得ないことではある一方、神楽伝承の課題を浮き彫りにする理由でもあります。つまり、メンバーの一人が服喪で欠席(この場合は該当者が太鼓奏者でした)しただけで奉納が中止されるというのは、伝承に偏り(＝メンバー全員が舞も奏楽もできていないと有事の際対応できない)があったり、伝承の層が薄い(＝継承者が少ない＝なので無理に引入れたり忙しいのに加わってもらったメンバーにあれもこれも覚えてくれとは言いがたい環境下のためピンチヒッターが育たず、特定メンバーの服喪やケガの際は「親亀コケたら皆コケタ」という事態が起きる)ことを物語っており、このことの克服にどの講社も頭を痛めているものとは思いますが、いざ起きたときのダメージは小さな講社程大きいという実態が浮かび上がっています。

コロナ禍の痛手を克服しつつあるみやこ町内の豊前神楽ですが、明るい兆しは見えつつも、伝承環境の厳しさは変わらぬところであり、今後も注視とともに支援や地力の回復に何が有効・必要なかを行政や各団体が協力しながら方策を模索してゆきたいところです。

北九州市

北九州市域で「豊前神楽」を継承し、活動されている大積神楽保存会(門司区)、合馬神楽保存会(小倉南区)、ならびに横代神楽保存会(同前)の3団体は、いわゆるコロナ禍を乗り越え、概ね従来の様相に復しつつあります。大積神楽保存会では、例年2月初旬の節分行事の時期に、博多の櫛田神社と下関の亀山八幡宮からの招請を受け神楽を奉納されています。偶々、本年は両社の節分祭日が同日だったため、舞手を2班に分けての奉納となりましたが、両所ともに見事な舞を披露され、列席者や参拝者の好評を博していました。また、本社である大積天疫神社への奉納はもちろん、地元の中学校区の夏祭りや敬老の日の催事などでも出演依頼を受けるなど、地域の内外ともに上演の機会と知名度が増加しています。このほか、合馬神楽保存会でも、地元の小学校の郷土学習としての神楽を伝承する授業を再開するなど、コロナ禍を経て、地域コミュニティの内外や世代間をつなぐ紐帯としての「神楽」が再評価されています。



神幸祭での奉納(夜間)



衣装などの目通し・風通し



上高屋神楽(R6.4.28 奉納)
(於:橋八幡神社御旅所(上高屋公民館))



横瀬神楽(R6.5.3 奉納)
(於:若宮八幡神社御旅所(横瀬公民館))

苅田町(南原神楽講)

苅田町の南原神楽講では、コロナ禍でも工夫を重ねて神楽の継承に真摯に努められた結果、コロナ禍以前と同様に、「戸前」・「御先」など豊前神楽を構成する演目の奉納ができており、例年奉納されている、みやこ町豊津錦町の稲荷神社に加えて、小倉城内にある八坂神社や行橋市行事の貴船神社など、奉納神楽の依頼が増えています。また、福岡県の神楽団体が一堂に会する「東九州神楽人の祭展」において、30もの神楽団体が活動する「神楽の里」京築地域の代表として公演するなど、活躍の場も大きく広がっています。

ただ、講員の高齢化は年々進んでおり、後継者の育成が重要な課題となっています。同講では、神楽を通じて人と人とのつながりを大切にし、神楽の楽しさを伝えて歴史を継承していきたいとの気持ちから、小学校や地域で子供を対象にしたPR活動を行われています。また、苅田町在住の外国人を対象に、神楽講座や神楽体験の場を提供されるなど、神楽の魅力発信にも力を入れています。

令和6年7月21日(土) 八坂神社奉納(北九州市小倉北区内)
9月1日(日) 貴船神社風鎮祭奉納(行橋市行事)
10月5日(土) 稲荷神社秋祭り奉納(みやこ町豊津)
10月20日(土) 苅田町在住外国人神楽講座・体験(苅田町中央公民館)
令和7年2月1日(土) 東九州神楽人の祭展神楽公演(大濠公園能楽堂)

行橋市

行橋市には今井神楽講、道場寺神楽講、稲童神楽保存会、元永神楽保存会の4団体がありますが、現在も活動を継続しているのは今井神楽講と道場寺神楽講に絞られます。その2団体も存続については苦境に立たされています。現在、後継者育成を兼ねて児童や生徒も舞手を担っていますが、受験シーズンとなると活動が限定的になってしまいます。また、進学や就職を期に地元を離れると身につけた技能も活躍の機会を失ってしまいます。現在は休止状態にある稲童神楽や元永神楽もかつては神楽に関心がある地元の児童、生徒たちの育成に努めていましたが、後継者が根付かぬうちに高齢化が進み、ついに老練の舞手が舞台に立つことは困難となってしまいました。

その逆境の中にあって道場寺神楽講も練習が限定的になってきていますが、新年祭では氏神を祀る北山神社に神楽を奉納しました。今井神楽講は神幸祭や新年祭等が執り行われた折、氏神を祀る熊野神社や今井津須佐神社・大祖大神社にて神楽を奉納したほか、2月1日(土)に大濠公園能楽堂で開催された「東九州神楽人の祭展」等に出演しました。今後、神楽に興味を持ってもらうためイベントの開催を考えています。

豊前市

2024年、豊前市内では9月から12月にかけて、秋祭りでの神楽の奉納が市内46ヶ所の神社で行われました。このほか市外からの依頼で8ヶ所、道の駅の定期公演が9回、年末年始の奉納が6ヶ所の神社で行われ、コロナ禍以前と比べ遜色無い状況に回復してきました。加えて、豊前神楽最大の特徴である「湯立神楽」の奉納も16ヶ所で執り行われ、秋の夜長にいつもと変わらぬ神楽囃子が響き渡りました。

一方で神楽を支える地域の氏子さんたちの意識には、微妙な変化が現れるようになりました。特に感じたのは時間の制限で、生活習慣の変化や高齢化による人手不足などがその要因かとも考えられます。その結果、奉納神楽という氏子が奉納料金を払い舞われる演目にも制限が見られるようになり、豊前神楽が伝統的に受け継いできた独特の奉納形態が危うくなるのではないかと危惧されます。

かつて夜を徹して舞われた神楽。それは神様に対する畏怖の念と、そのご加護を求める人間の謙虚な気持ちの表れであったと思います。祈りの文化の継承が求められています。



稲荷神社での奉納



能楽堂での奉納



今井神楽講(御先)



道場寺神楽講(米撒)



櫛田神社節分夜祭での奉納(大積神楽)



亀山八幡宮節分祭での奉納(大積神楽)

